

家庭科

高畑律子・浦上千歳

I 研究の経緯

1 昨年度の研究

学習指導要領・改善の基本方針の中で、家庭科については、社会の変化に対応しながらも自立的に生きる基礎を培うことを重視し、小中の内容が体系化されている。本校でも研究主題「学びがつながる授業づくり」に基づき、小・中の「学びのつながり」をスムーズにするために、Ⅱ期の小学校家庭科で科学的な視点を取り入れた学習を足場づくりとして行い、Ⅲ期の生活を科学的にとらえた実践に基づいて課題をもってとらえなおす力をつけていく学習を仕組んできた。昨年度の取組みの中で、科学的思考を取り入れることで生活実践力の高まりがみられることが分かった。そして、Ⅱ期をさらに前期と後期に分け、家庭科教育5年間における学びのつながりを図式化し整理することができた。また、どの時期にどの視点の科学的思考を重点的に取り入れるのかについて系統立てることもできた。

2 今年度の研究

本年度は、4内容の各時期における実践的取組みを積むと同時に、昨年度の取組みの中で生活実践力の高まりに関わるであろうとされた新たな視点「文化的・伝統的な視点」からのアプローチも進め本研究3年次としてのまとめを行っていく。その際、自分から近接環境へ、さらに遠隔環境へと生活空間及び意識を広げながら、衣・食・住の基礎的・基本的な知識や技能の習得過程、家族や家庭の機能についての理解を深めていく。

3 中学校卒業時のめざす生徒像

科学的な見方や考え方ができ、自己の生活の自立ができる生徒

- 生活を科学的にとらえる能力（知識・技能・思考力・表現力）・態度がある。
- 家庭生活および家庭の機能についての理解が深まっており、知識が体系化している。
（＝科学的概念が形成されている）
- いろいろな事象に対して、これらを総合的に活用することができ、これからの生活を展望し、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度が身についている。

II 本年度の研究計画

1 授業仮説

身の回りの生活と文化との結びつきに気付き、科学的にとらえることができれば、課題をもってよりよい生活を創造していこうとする意欲が高まり生活実践力がつくであろう。

Ⅱ期(小学校5年生～中学校1年生)

小学校5年…生活を科学的な視点から見つめ直しできる・わかることをふやし生活に生かす学習
小学校6年～中学校1年…生活を科学的な見方・考え方でとらえ自ら工夫して生活を改善する学習

Ⅲ期(中学校2～3年生)

中学校2～3年…生活を科学的にとらえた実践に基づいて、課題をもって生活をとりえ直す学習
（思考、判断し、表現する）

Ⅱ期, Ⅲ期それぞれにおいて, 以上の視点を踏まえて授業を行うことで, 中学校卒業時には生活を「科学的な見方や考え方」でとらえることができ, 課題をもってよりよい生活を創造していこうとする生徒になるのではないかと考えた。

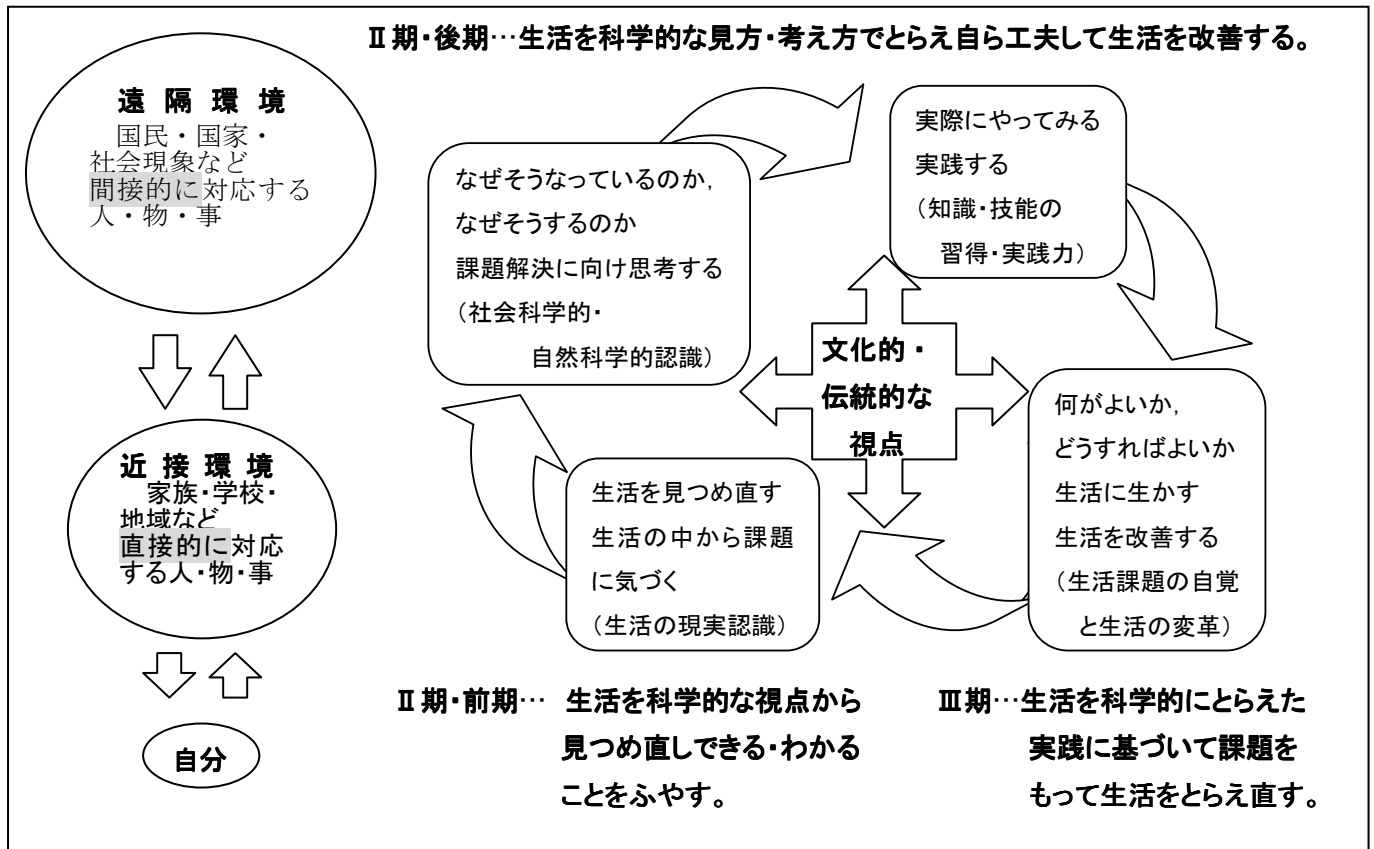


図1 家庭科におけるⅡ期・Ⅲ期の学びのつながり

表1 学習方法の科学的な視点

Ⅱ期	小学校5年生	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物を使った説明 ・丁寧な直接体験での技能習得 ・今までの生活を科学的な視点から見つめ直す学習
	小学校6年生 中学校1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・データ(数値)やグラフからの思考・考察 ・推論を行ってからの実技体験 ・文化的・伝統的な視点を取り入れた学習 ・個別の生活経験・様式を一般化, 概念化
Ⅲ期	中学校2年生 中学校3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・理論を取り入れた学習 ・文化的・伝統的な視点の活用 ・これまでの学習で習得した知識・技能を活用した実技体験 ・地域社会と家庭生活のかかわりをふまえた学習による概念化

2 研究の目的

Ⅱ期

日常生活に必要な衣食住に関する基礎的・基本的な知識及び技能の習得過程において、数値やデータ、事実認識を踏まえた推論や思考及び生活の見直しや体験的な活動を行うと、生活的概念から科学的概念への発達スムーズに促され、具体的思考から抽象的思考への移行もスムーズに行われるという授業仮説を検証する。さらに、本年度は、「文化的・伝統的な視点」を取り入れることで、先人からの知恵が生活知の拡大及び深化を促し、科学的概念の発達を促すという授業仮説を検証する。

Ⅲ期

日常生活に必要な衣食住に関する基礎的・基本的な知識及び技能の習得、家庭の機能についての理解において、自己の課題から生活を見直し体験的な活動を行うと、「科学知」と「生活知」の「のぼりおり」をさせる中学校家庭科の授業が、科学的概念に基づく抽象的思考を行う場面で有効にはたらく、「学びの深化へ」繋がるという授業仮説を検証する。さらに、本年度は、「文化的・伝統的な視点」を取り入れることで、先人からの知恵から生活知と科学知ののぼりおりや知を繋げるネットワークが進化するという授業仮説を検証する。

3 研究の方法

Ⅱ期

「わ!『食の世界遺産』への登録は我々の手に!」

A：日本食文化の特徴を教師が具体物や資料を提示しながら丁寧に説明し、1食分の献立を立て、調理実習をする群

B：日本食文化の特徴を自分達で調べ、ジクソー学習の形態で共有・検討し、1食分の献立を立て、調理実習をする群

両群とも5大栄養素の働き、調理方法等についての基礎的・基本的な知識及び技能を習得しておく。その後、日本食文化という「文化的・伝統的な視点」を取り入れた授業構成で、1食分の献立を立て、調理実習を行う。「文化的・伝統的な視点」を取り入れることで、先人からの知恵が生活知の拡大及び深化を促し、科学的概念の発達にどう関わるのか分析し検証する。また、学習方法について、教師が、具体物や資料を提示し丁寧な直接体験で技能習得を行っていく群とジクソー学習の形態で行っていく群とで比較し、科学的概念の発達の方法にどう関わるのか分析し検証する。

Ⅲ期

古来より人の生活に欠かすことのできないものであった布に焦点を当て、歴史を追いながら人と布がどうかかわってきたかを学習する。実習では、日本の庶民にとって、食べることにのみならず、薬やコーティング剤として活用されてきた柿を取り上げ、柿渋染めを実践させる。さらに自分たちで染めた布を使って、弁当袋の製作を行う。

検証方法

私たちの暮らしと布とのかかわりについての歴史的学习、柿渋染めの実践、さらに表現活動として、その布を用いての弁当袋の製作を行うことで、日本の伝統文化を知り、さらに継承し発展させようとする気持ちが生まれるか、事前・事後アンケート、実践後の感想の分析などから検証する。

計画

対象：広島大学附属東雲中学校 第2学年全員（80人）

内容：布と柿に関しての歴史的な学習を行う。柿渋染めの実践をする。弁当袋の製作を行う。

計画：6月・・・中学生に事前アンケート実施

10月～12月初旬・・・歴史的内容の授業、柿渋染め、弁当袋の製作

12月中旬・・・事後アンケート実施、分析、考察